

物質代謝論から人間と社会を考える 上

「蝶の雑記帳 126-1」

「蝶の雑記帳 125」で、資本の増殖運動が地球規模で経済や政治を支配する現在の資本主義的社会システムが危機に陥っている問題を理解しようと努力したが、危機がどのように進展するか見通すことの困難さを知った。それでも、この問題を考えずに済ますことはできない。この問題に実践的に取り組んでいる斎藤幸平の考えの基礎にある理論的研究書『大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝』を勉強しなければならない。

斎藤の研究は、現在新たに編まれつつある膨大な『マルクス・エンゲルス全集』に含まれるが、20 世紀の『マルクス・エンゲルス全集』に含まれていなかったか不十分であった観点を掘り起こすものである。「マルクスと惑星の物質代謝」という主題に関連する重要事項を極力とりこんで、理論的にまとめた著書にしようとしている。一冊に凝縮されているが、その背後にマルクスのたくさんのノート類とそれに対する諸研究の読みこみの上でなされた著作である。この書物は、晩期マルクスの考えが、既存のマルクスの出版物から形成されたいわゆる「マルクス主義」を超え出たものだということを教えてくれる。amazon 書評を覗くと、20 世紀にマルクス主義に打ちこんで活動した人のなかに、斎藤の著作を物足り

なく感じ、むしろ違和感を強調する人がいることが判る。しかし園丁は、斎藤が構造的に整理している「物質代謝論」は、最近の諸研究書のなかでもおそらく卓越しているだろう、と推測した。さらに言えば、現在必要なのは、そういうしっかりした理論に基づく実践的な運動であり、実践的な運動は、基本的に同じ方向性をもつ人々の協力がなければ前進しない、と考える。第二次世界大戦後の高度経済成長から二世代余りを経て、人々とその考え方つまり世相が大きく変わった21世紀前半の時代、危機にある社会システムを変えていくために、斎藤の理論と実際の行動は賛同できるものだ、とわたしは判断する。

マルクスのノート類は、そのときどきに関係する諸分野を勉強して考えていたことを明らかにし、鋭い考察が緊密な文章に表現されていることによって、有益な論考になっている。それを分析し元の『資本論』に足りなかった重要な論点を組みこんでいく斎藤は、新たな『資本論註釈書』を書いているかのようなのである。斎藤の『マルクスと惑星の物質代謝』は、最近の同類の議論と合わせれば、マルクスの『資本論』を補完する著作、と園丁には思われる（過大な例だけれども、儒学の古典群に重要な視点を加えた朱熹の註釈書は“新儒学”と呼ばれる体系をつくりだした）。愚かな園丁は、マルクスのノートとそれを取り入れた改訂「物質代謝論」を著した斎藤をまねて、自分の雑記帳にあてもない思索を書きつけようとしている、それが何がしか意味を生むだろうと期待して。

I. 物質代謝論の位置づけ

1. 科学的認識論と自然科学的世界観のなかに位置づける

斎藤幸平の物質代謝論は、後期マルクスが、社会的な物質代謝（経済的で、形態的過程に規定される物質代謝）に加えて、自然的な物質代謝（歴史貫通的で、素材的過程としてある物質代謝）をとり上げて議論したことを、明らかにした。二つの連関するが異質な物質代謝を分節的にとらえることで、マルクスの経済学批判は、現代の「人新世」の問題まで視界におさめる地平を切り開いていた、というのが斎藤の提出する見方である。

この見方に感銘する園丁は、自分の流儀で、哲学基礎論から「物質代謝論」を組み立ててみようという考えを起こした。大げさすぎるかもしれないが、そうすれば、自分の頭のなかを整理することができるだろう。

「物質代謝論」ということばを見たときわたしは、カントの認識論になじむ考え方だと感じた。急いでつけ加えるが、カントをもちだすと多くのマルクス主義者が観念論と見なすかもしれない。しかし、カントの認識論はむしろ唯物論的であり、ニーチェが言った「神や魂や自由や不死といった人間を閉じ込める檻をこじ開けたのはカントの力と賢さだった」という見方が正しい。反省してみれば判るように、現代のわれわれが一々ことわずに事物事象について話をして

いるとき、依拠しているのは自然科学的な認識方法である。そして、自然科学的な認識がどのようにして達成されるかをよく考えてみれば、それがカント的な認識論に基礎を置くことが判る（この観点は、電子書籍『科学的認識論の構成』で示したが、以下の議論で具体的に現われるだろう）。

カントが基礎をすえた科学的認識論は、世界を自然的対象と認識主体が向かい合う構えとしてとらえ、具体性を捨象した枠組みを設定して認識を開始する（ユークリッド幾何学やニュートン力学の体系がその枠組みのモデルである）。その認識は、事物事象の要素を端的に「モノ自体」として語ることができず、諸要素の関係だけを明らかにする。このことは、物理学や化学や生物学を勉強してみれば知られる。マルクスとエンゲルスの「唯物論」は、そういう自然科学的な認識以上のことを言っているのではない。

基礎にある認識論をいちいち言わずに事物事象を語るとき、諸事物は物質的なものとして表現され、諸事物が関係を取りむすんで生起する諸事象を語ることになる。マクロコスモス(宇宙)からミクロコスモス(人間)まで、現代の自然科学が明らかにする世界、すなわち自然的なまた人間的な世界は、一言で表現すれば、諸物質の連関する変移として現われる。その諸物質連関変移を解明するのが自然科学である。人間的なあるいは生物的な世界は、全自然的世界に内包される。

この世界観で重要なのは、諸物質連関変移は反転してさか

のぼることのできない歴史的な事象として起きることである。始まりを宇宙論で語り、宇宙の変遷のある段階で生命が発生し、生物の進化のなかで人類が登場する、というわれわれの自然史理解がそのことを雄弁に示している。

ところで、生物学の発展のなかで、生物が生体を形成維持して生きる化学的な機構が明らかになると、「代謝」ということばが生理学的な概念として確立した。ここで考えようとしている「物質代謝」という用語は、現代の日本ではたいてい、その「代謝」を意味する、と受けとめられるだろう。最初『大洪水の前に』を読んだとき、わたしもそのように理解した。しかし、読み進むにつれて違和感が生じて語のゆらぎを感じるようになった。もちろん、「代謝」という語は比喩的に生体よりも広い対象に使われて、意味の広がりを生じさせている。斎藤は物質代謝という日本語を気をつけて使用しているように見えるが、そもそもマルクスのこの語の用法にゆらぎがあるのではないか、と思える。

いろいろ調べて、日本語で物質代謝と翻訳されているドイツ語「stoffwechsel」に多義性が潜んでいることに気づいた。ドイツ語「stoffwechsel」に対応する英語は「metabolism」という。英語「metabolism」を、Oxford 英英辞典は、「生物体が食料その他を成長のためのエネルギーと物質に変化させるプロセス」と説明する。現代日本で通常使われる「代謝」と同じ意味である。ところが、ドイツ語では二つの語を結合

した合成単語が許される。「stoffwechsel」は、物質・質料などを意味する「stoff」と交代などを意味する「wechsel」の合成語である（英語で、前者は「material」、後者は「change」に相当する）。合成語「stoffwechsel」は生理学での生化学的な反応を表現するために作られたと考えられるが、ドイツ語の話者は、「stoffwechsel」を見ると元の「stoff wechsel」すなわち一般的な意味での「物質変移」を同時に思い浮かべることが避けられないだろう。複数漢字表記の日本語も合成語と言えるが、「代謝」が漢語で「古いものと新しいものの入れ代わり、移り変わり」を意味する成語であったことを知らないわたしのような者は、「物質代謝」を狭く生体内の新陳代謝に解釈することが起きる。「物質代謝」という語が比喩的に拡張して使われるときも、「物質の入れ代わり、移り変わり」という広い意味を思い浮かべることができにくい。こうして、マルクスの用いた「stoffwechsel」に対して、独・英・日で微妙に異なる意味で受けとる事態が予想される。

今知ったことからすると、用語「stoffwechsel」の多義的なニュアンスを区別してマルクスの文章を読むことが、そこに語られている思想を的確に理解するのに必要だ、とわたしは考える。そこで、「stoffwechsel」を、生理学的な用語である「物質代謝」と「stoff+wechsel」がもつ一般的な意味「物質変移」とに区別することにしよう。すなわち、生体に関する生理学的用語「物質代謝」に対して、それがもっと広い事象

に対して比喩的に用いられると、“物質代謝”は自然界の階層縦断的な（物理・化学・生物学的な）事象に当てはまる「諸物質関連変移」略して「物質変移」を意味する場合がある、と考えるのである。

2. 「人間の生活」と「物質代謝」

考察を、自然界一般に関する話からマルクスが主題とする人間の生活に移そう。人間の生活は単に生理的な物質代謝だけで生きることではない。生理学的な用語「物質代謝」は生体が外から物質を取りこみ利用できない物質を排泄することを含むから、その考察は人間の外にまで広がる。マルクスは、農業生産における土壌の肥沃度劣化や耕作地拡大・森林伐採による気候変化などを自然科学を応用して考察する文献を勉強したとき、そこで使われた「物質代謝」ということばで人間の生活に切りこみ、外界の自然科学的な事象まで包含する見方を追究することになった。マルクスが人類の生産活動を拡大的な「物質代謝」として注目すれば、人間と相互作用する環境にまで視界が広がるのである。すると、その物質代謝は人間の外の自然界に反作用を及ぼすから、人類の生産活動を自然界の「物質変移」のなかで観ることになる。

ところで、通常生産活動ということばを人間以外の動物には使わないから、人間の生産活動は、単純な生体維持という意味の物質代謝とは質的に異なる面をもつのである。その質

的な差異は人間の生活のどこから生じるのだろうか。人類が進化の途上で霊長類から分化したあとにそれは生じたはずである。園丁の考えるところ、旧石器時代の狩猟採集バンドの生活は生産ということばにはふさわしくなかっただろう。狩猟採集バンドは、石や草木や動物の骨でさまざまな道具をつくって食料調達をし、原初的な衣類住居をつくって生活したと想像できるが、その生活はまだチンパンジーの群れの生活の延長上にあった、と言えるだろう。

人類の生活が質的に変わったのは、現代の科学的な知見によれば、最後の氷河期が終わって温暖な気候になり海面が現代のそれに近くなったころ、植物を栽培し動物を飼うようになってからだ、と考えられる。植物の栽培と動物の飼育は、狩猟採集とは異なる生産活動とすることができる。この生活 방식は、食衣住を改良し、生活に用いる諸道具を質量ともに発展させるシステムを生みだした。進展する生産活動は、食料を得て生体を維持し生命を子孫に引き継ぐだけの狭い意味の物質代謝から、動植物から無機物質まで環境にある諸物質を巻きこむより拡張された物質代謝へ発展させる。人類の文明化と多様な文化生活はこうして始まったのである。

生産活動が始まった原初の段階で、後世の経済学で使われる用語が指すものの原形をとらえることは、経済を物質的に観るのに役立つだろう。植物の栽培と動物の飼育で始まった食糧生産は、初めのうちは狩猟採集を併用せざるをえなかつ

ただろうが、生産力が上がり 1 年間の生活が成り立つようになれば安定する。協働する大家族を養うよりも収穫量が増えるようになれば、家族の人数が増えていく。以前の自然生活は、他の動物たちと同じく生態系にいる動植物のバランスに依存していたが、植物の栽培と動物の飼育は規模が大きすぎない範囲では生態系のバランスをそれほど崩さない。人口が増えつつあっても食料生産力がまされば、余剰食糧が生じる。その余剰食糧を資本の原型と見なすことができる。

耕作畜産漁労のためのさまざまな道具類を作るとなれば、食料の生産高はさらに増えていく。耕作畜産漁労従事者の道具類の製作は必要な副業となる。もちろん、寒さを防ぐ衣類や雨風を避ける小屋を作ることが生存を助ける。生産活動を始めた人類はさまざまな作業をこなさなければならなかった。その諸生産物は人間の生活の必需品になっていく。人類の生産活動は分業的にならざるをえない。やがてそれぞれの作業は専門的になっていく。こうして人類は、分業的な協働によって生産し生活する社会を形成することになった。そういうある程度大きくなった社会では、生活単位である家族にとっての余剰農産物とそのほかの余剰生産物が、流通してそれを必要とするほかの家族に行きわたらなければならない。それが社会に経済的な機構を作ったのである。この段階では、余剰農産物とそのほかの余剰生産物が資本の原型である。

ところが、人間はその経済機構をうまく運営する能力が足

りないせい、あるいは人間の狡知のせい、あるとき、地域で農業生産を中心に諸生産物を生産している人間たちを強権的に支配して、余剰農産物とそのほかの余剰生産物を略取する政治的な体制がつくりだされた。それが、古代世界のどこでも始まった「土地とそこに住む住民を支配する体制」である。その支配は直接的で、略取は目に見えるやり方で生産の現場で行なわれた。上では資本の原型ということばを使ったけれども、このやり方で略取された物はそのままでは資本ではない。だが、社会と経済のことは次の節で考えよう。

人類の拡張された物質代謝は、生物の歴史上それ以前には例外的にしか起きなかったほどの環境変化をもたらし、自然界の諸物質の連関の変移を生じさせることになる。斎藤幸平の新たな物質代謝論は、マルクスが経済学批判を行なうなかでそのことに気づき、現代の環境と資源の問題を先駆けて記述する一人となったことを明らかにした。生物が生じさせた例外的に大規模な物質変移の例として、先カンブリア紀（紀元前 10 億年以前）のおよそ 27 億年ころに始まったシアノバクテリアによる酸素ガスの遊離（海中と大気への放出）を思い起こすのは、有益だろう。それは以後の生物に劇的な環境変化をもたらした。生物そして人類は、本来的に、この惑星における諸物質連関変移の重要なアクターとして歴史的に登場した、と考えなければならない。

II. 社会と生産活動の人類史 素描

拡張された物質代謝を具体的な生産活動の場でとらえるためには、人間社会のあり方を知らなければならない。

人間社会の構成の仕方は、狩猟採集バンドのような人類の集団に観察される生態学的な本性に根ざしている。母と娘が群れにとどまる母系の集団を形成するニホンザルや、複数の雄と雌が集団を形成するチンパンジーが例となるだろう。いずれも集団内に序列があって、体力的に勝る雄が集団のリーダーになるという点でも、人間社会の見本となる。

より文化的な人間の社会では夫婦と子どもたちからなる家族が基本単位となる。ただし、いとこ(従兄弟姉妹)よりも近い血縁の男女が夫婦となることはない。地域によって、父と息子の系列で一族をたどる社会と母と娘の系列で一族をたどる社会とのちがいがあある。父系で家族を継承する社会では、古くは、両親の息子たちが結婚して子どもができて、共同的な大家族を形成する傾向にあったのだろう(中国では、今でも男のいとこたちを兄・弟と呼び、女のいとこたちを姉・妹と呼ぶ習慣をとどめている)。さらに、いとこ同士の結婚を禁止する社会、たがいの父が兄弟のいとこ同士の結婚を禁止するが交差いとこの結婚を許す社会、日本のようにいとこ同士の結婚を許す社会に区別される。この慣習は、異なる家族が婚姻関係によって結びつくの規制するので、社会の構成に重要な効果をもつ。

そのような生態学的・文化的な家族関係の上に、生産活動をする人間社会に特有の社会関係と主要な働きをする経済的および政治的な機構が形成されて人類の社会システムが形成されたのである。そして、その社会システムは歴史的に変遷してきた。言い方を変えてみれば、一定の地域で、そういう家族関係の結びつきが網目をなして血縁地縁的な共同体、さらにそういう共同体が連合してより大きな社会が形成されていった、と概略的にとらえることができる。

植物を栽培し家畜を飼育するようになった人類は、一定の地域で生産活動をおこなう少人数の集団を形成しただろう。粗く言えば、最初期の協働で生産する集団は、生態学的な大家族が多少大きくなった生活共同体で、そこには生産物の（後世の経済学的意味の）分配というようなものはなかった、と想像することができる。その小さな生活共同体は、原初的でも、構成された社会をなし、分担して協働する機構をもっていた、とすることができる。前者がいわゆる社会の原基であり、後者がいわゆる経済の原基である。小さな生活共同体が発展して村落共同体・氏族部族社会・首長制社会……となるにつれて、二つの原基がしだいに複雑な社会機構と経済機構を形成していったと見ることができる。こう考えるとき重要なのは、経済は社会と切り離せない概念だということである。

土地にあって環境にある諸物質から道具をつくり、食料そ

の他の生活必需品を労働して生産することは、みな目に見える現実的で物質的な営みであり、それが人間生活の「土台の構造」をなすと見ることができる。それをマルクスは「下部構造」と呼んだ。しかし、生産された食料を食べ、ほかの生産物を作り使用消費して人間的で文化的な生活をするのもまた目に見える現実的で物質的な営みである。こちらも人間生活の「土台の構造」をなす。マルクスが「下部構造」と呼んだのは、このような人間生活の基礎にあるもののことだろう。しかし、言うまでもなく、人間の生活は社会関係の中で営まれる。東アジアには、世(社会)を適切に経営し人民を救済する「経世済民」という思想があった。現代でも、経済ということばを使うときにはいつも、「経世済民」ということばを思い浮かべなければならない。そうすれば、経済に対して社会を軽視する現代の考え方を改めることができるだろう。

しかし、人間の生活は生産活動に尽きない。だから、生活を考えるときには、そこで全生活をおくる社会は、経済と対になる狭い意味の社会よりももっと広い意味でとらえなければならない。「経世済民」ということばにある「世」は、そういう広い意味の社会を意味するだろう。経済や政治は、広義の社会に包含される概念なのである。

「物質代謝」の視点からは、社会を、経済の単位でもある家族から始まり人間の関係が段階的に広がって構成される

ものとしてとらえ、生産活動としての経済の機構がその社会の構成に編みこまれる、と考えるのがよいだろう。その事象は歴史的であって、終始抽象的で観念的に見ていくのではなく、具象的で物質的な「物質代謝」としてある人類の生活と生産活動を観察するアプローチを採るのでなくては成功しないだろう。そういうアプローチが、社会と経済の複合体さらに政治機構について本当の理解（概念の構成）へ導く。

以上の方法論に基づいて、この第Ⅱ節は、社会と経済と政治をおおまかだが歴史的にとらえることをめざす。それは、柄谷行人の新著『力と交換様式』の簡略すぎる図式的歴史理解に不満だからである。経済と政治が複雑に絡まる社会をあまりにも単純なごく少数の観念的なことばで言い取ってしまうやり方に納得がいかないからである。柄谷の図式はマルクスとエンゲルスの概念図式を換骨奪胎したもだが、元のマルクスとエンゲルスの大づかみな概念図式も当時の学問水準に制約されていた、と思う。愚鈍な園丁は、自分の頭で考えて社会・経済・政治について納得のいく理解を得たい。

園丁は、古代の初期社会が現代の資本増殖主義社会にまで発展した歴史を、三段階に分ける柄谷図式の代わりに、下記の四つの時期に区分して、それぞれの段階で社会と経済機構・政治機構がどのような状態にあったかを勉強して整理しようと思う。経済と政治とは足並みをそろえて変化してきたのではない。経済機構は、政治機構とは相対的に独立して、

徐々に能率的な形に形成されてきた。だから、経済機構と政治機構を柄谷流の単純な図式区分でとらえることは困難だ、と園丁は考える。

歴史学の分野で行なわれることの多い古代・中世・近世・近代の四つに分けるやり方を採用しよう。経済は、近代が始まるまで相対的に自立して政治的時代区分とは異なる歩調で発展してきた。おおよそ王権が支配する国家が始まったころから近世が終わるころまで、暴力的な上部構造の下方で下部構造が形成されたと表現しては言い過ぎだろうか。

下記のように(A)～(D)四つに時代区分して、政治と経済の変遷を具体的に考えることにする。

- (A) 古代国家が形成されるまで
- (B) 王のいる社会システムが成熟した中世
- (C) 資本主義経済機構が王政を掘り崩した近世
- (D) 資本主義システムが人類社会を覆い尽くす近代

ところが、それぞれの時代のようなすを具体的に理解し書きとめようとして、園丁の勉強はたどたどしいものになり、第Ⅲ節へつなげるのに役立つように簡略に要約することに成功しなかった。この第Ⅱ節が浮いた形になるのを避けるために、書きとめたノートは付録にまわすことにする。

